広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第67号　2018　289－298

広島大学人間生活系コースにおける家庭科教員養成カリキュラムの検討

― 教科観を育むガイダンス授業の構想 ―

鈴木明子・村上かおり・梶山曜子・今川真治・松原主典・髙田　宏

（2018年10月４日受理）

Reconstructing the Curriculum for Home Economics Teacher Training in Human Life Sciences at Hiroshima University: Lesson Plans to Nurture Students' Perspectives

Akiko Suzuki, Kaori Murakami, Yoko Kajiyama, Shinji Imakawa, Kiminori Matsubara and Hiroshi Takata

Abstract: The core subject of the human life sciences education curriculum at Hiroshima University was reconsidered in examining the perspectives of students undergoing home economics teacher training. The outcomes and problems of the 2016 and 2017 classes were reported and reconstructed for the 2018 class. The 2016 class's problem was that the recognition of knowledge obtained from practical tasks were not linked effectively to the performance subjects. Therefore, five concepts, i.e., health, collaboration, wealth, culture, and home economics were set as concepts for product planning in the 2017 class, and a panel discussion with seven faculty members as panelists was held at the beginning of the course. The results clearly show that the class discussion during in the panel discussion was effective in deepening the students' awareness of the issues of life. However, a problem emerged in that the recognition of life problems was not fully utilized for task execution by the students. In 2018, we therefore focused on performance issues and conceived a lesson plan that prioritizes deepening the students' awareness about contemporary life issues.

Key words: Home Economics Teacher Training, Views of Subject, Curriculum, Home Economics, Task of living
キーワード：家庭科教員養成，教科観，カリキュラム，家政学 生活課題

１．はじめに

家庭科の背景学問の明確化と教科教育および教科内容の実質的な連携を課題として[1) 2) 3)]，広島大学教育学部人間生活系コースの家庭科教員養成カリキュラムの核となる一年次生対象科目「人間生活（家庭科）教育概論」の再構想を行ってきた。

前報[4)]では，2015年度の課題として，生活課題を概念的抽象的にとらえることはできたが，自分自身の生活者としての立場や課題を意識するには至っていないこと，背景科学としての家政学の理解が役立っていないことが明らかになった[5)]。そこで2016年度の同科目では，商品の企画提案と調理実践を含むパフォーマンス課題を設定[6)]し主体的に協働的に課題追究する学習過程を提案した。それらは課題を追究する中で生活認識を深め，生活者としての自覚を高めて，背景科学としての家政学の理解や生活実践への意欲につなぐことを意図したものであった。しかしながら，パフォー

マンス課題を追究する過程で，商品の企画構想と生活認識の深化を同時に進めることは難しい状況が見て取れた。そこで2017年度には，商品を企画構想するための５つの生活概念（コンセプト）について，家庭科教員養成に関わるコースの教員全員がパネラーとして授業に参加するパネルディスカッション方式で授業を行った。

本報告では，2015年度から内容の改善を図っている「人間生活（家庭科）教育概論」の２年目（2016年度）および３年目（2017年度）の成果と課題を検証し，さらに今年度（2018年度）の内容を再構想して提案することを目的とする。

２．2016年度授業の成果と課題

（1）2016年度授業の構想と実施

最終的なパフォーマンス課題を「家族イベントのための市販弁当（500円程度）」の企画立案，調理実践およびプレゼンテーションとし，主体的に協働的に課題追究する学習過程をつくった。

2016年度の授業内容は表１の通りであった。2015年度からの主な改善点は，家政学についての解説や情報提供は最小限にとどめたことである。パフォーマンス課題に対応していく中でそれらに関心をもたせ，理解させる場をもつとともに，現代の生活課題を総合的・体系的にとらえられるよう学習方法の改善を図った。

第１ステップはガイダンス，第２ステップはパフォーマンス課題の把握と一次企画の構想，第３ステップは一次企画の発表，再検討と二次企画の構想，および調理実践の計画・準備，第４ステップは調理実践と総括を行い，自分自身の生活課題をみつめ，課題解決に向けての具体的な方策を考えさせる場とした。また，クォーター制の導入，および大学と企業との包括協定の一環でオタフクソース（株）の協力を得られたこともこのカリキュラムを可能にした。ここでは「本質的な問い」を「生活課題はどのようにとらえられるのか」とし，家族イベントのための「弁当」の在り方や内容を追究することによって，食生活，家族関係，ライフスタイル，生活者としての環境・消費へのかかわり方など，多面的に現代の生活課題をとらえることができると考えた。

また，それらを解決するために必要な情報を収集し，伝える表現力を培うことができると考えた。教員７名は，それぞれの専門科学の立場から学生たちの企画について助言することとした。担当教員全員，企業の各担当者などが参加するパネルディスカッションによって，多様な視点で提案企画に対する意見交換を行えることも効果的であると考えた。

表１　2016年度授業（Ｓ・Ｋ：教科教育担当）

	月／日	授業内容	担当
1 2	10/ 5	ガイダンス：人間生活教育と家政学 生活のとらえ方と家政学の構成領域 【次週までの課題】市販弁当をリサーチ・購入（条件：ホームカミングデー昼食として個々500円程度）	S・K
3 4	10/12	生活課題を見出す（市販弁当を売り手と買い手の立場で斬る）各班発表	S・K
5 6	10/19	【パフォーマンス課題（最終課題）】の提示「家族イベントのための市販弁当の企画と調理」（条件：500円程度，家族構成，イベント自由）企画案の作成（4人×5班＋3人×1班）	S・K
7 8	10/26	企画案の発表（コンセプト（ネーミング），サブコンセプト（価格，栄養，素材，配色，仕掛け，売れ筋）等） パネルディスカッション	全員
9 10	11/ 2	収集した情報（課題）の分析と改善方策の検討	S・K
11 12	11/9	グループによる生活課題追究の成果発表，協議，調理実践に向けての準備	S・K
13 14	11/16	調理（6班）（班員分＋教員分），試食，発表，相互評価	全員
15	11/30	生活者としての発達のために（現代の生活課題と育成する生活能力）・講義の総括（最終レポート提示）	S

（2）2016年度授業の成果と課題

授業終了後に履修者（29名）のレポートの記述内容を次の視点で分析し成果をとらえた。

① 生活課題を具体的にとらえられているか
② 自己の生活者としての課題を認識しているか
③ 家政学の理解と生活実践を結んで考えられるか

図１に，2016年度授業の最終課題における「生活課題」のとらえに関する記述から抽出した語句を挙げ，件数を示した。本授業で「家族で食べる市販弁当」を企画する過程で気づいた「現代の生活課題」とともに，改善できる「自分自身の生活課題」を最終的にどのようにとらえたのかを示している。

生活課題のとらえは履修者によって多様であったが，パフォーマンス課題に含まれる要素「食」や「家族」に係る言葉が多く抽出された。一方，自分自身の生活課題も具体的な記述が多くみられ，「生活スタイル」「家事」「教育」などが多く挙げられた。ワークシートの記述事例を次に挙げる。

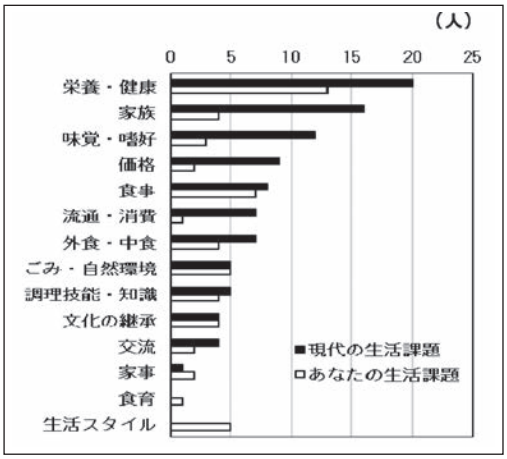

図１　2016年度授業における「生活課題」のとらえ

【M さんの例】

・・・・自分自身の生活課題である栄養の偏りについてさまざまな視点から改善策を考えた。・・・まずは生活スタイルについて考えた・・・・次に家族という視点から考える。・・・技術面では調理のためのさまざまな知識や技術を習得することが必要である。・・・環境という視点でこの課題を見ると・・・

【O さんの例】

・・・健康面からみていくと・・・食事によるダイエットのへの認識や知識の不十分さからこれらが招かれており，・・・教育現場などでのさらに充実した食育の実践が図られるべきだと考える。・・・台所の役割の外部化・・・共働きという家庭が増えており・・・家事労働の分担・性別役割分担についての問題も考えなければならない・・・。

いずれも表現が具体的で，自分のこととしてとらえており，かつ生活を多面的にとらえ，実践への足掛かりをつかんでいることが見て取れた。このように，2016年度授業では，実践を通して生活課題を追究する中で，具体的な生活課題を認識し，自分と環境とのかかわりを問い直し実践するという家政学の理解に基づいて生活改善の方向を意識している状況をとらえることができた。しかしながら，抽出された語句が「食」や「家族」に偏っていることから，継続的に考えさせたい本質的な問いとパフォーマンス課題の遂行における課題認識や情報整理が効果的に結びつかなかったことが課題として挙げられる。パフォーマンス課題に対応していく中で，多様な生活課題やそれらの関係に関心をもたせ，理解させる場をもつとともに，現代の生活課題を総合的・体系的にとらえられるところまでは至らなかった。

３．2017年度授業の成果と課題

（１）2017年度授業の構想と実施

2017年度の授業内容は表２の通りであった。15回の授業は４つのステップで構成した。まず，第１ステップ（第１回）はガイダンス，第２ステップ（第２回から第６回）は前年度の商品企画におけるコンセプトとして提示された「健康」「協働」「豊かさ」「生活・地域文化」「家政学の意義」について家庭科教育学及び内容学担当教員７名をパネラーとしてディスカッションを行った。それにより生活者としての自己の課題を意識させ家政学の理解を深めることを意図した。これ

表２　2017年度授業（Ｓ・Ｋ：教科教育担当）

	月／日	授業内容	担当
1	10/4	ガイダンス：人間生活教育と家政学 人間の生活と営み，教育機能，家庭科の背景学問としての家政学 5つのテーマ「健康」「豊かさ」「家族協働」「地域文化」「家政学」で生活への理解を深めることを提案	S・K
2		「健康な生活」についてパネルディスカッション①【事前課題に基づいて先生方から話題提供と問いかけ】班別（4人×6班，3人×1班）に意見交換），質疑応答，WS 記入	全員
3	10/11	「家族の協働と家庭生活」について，パネルディスカッション②【事前課題】①同様	全員
4		「豊かな生活」について，パネルディスカッション③【事前課題】①同様	全員
5	10/18	「生活文化・地域文化」について，パネルディスカッション④【事前課題】①同様	全員
6		「家政学の意義」について，パネルディスカッション⑤【事前課題】①同様，「満福玉手箱」紹介 【次週までの課題：弁当リサーチ】	全員
7	10/25	5H弁当の内容とコンセプトを再考し（春向け），売り方を構想する，教員から教えてもらいたいこと（専門的情報，考え方のヒントなど）を挙げる（教員は次週までに回答，資料として提示）	S・K
8			
9	11/8	企画案の再考	S・K
10			
11	11/15	企画案の発表	全員
12			
13	11/22	生活者としての発達のために（現代の生活課題と育成する生活能力）	S・K
14			
15	11/29	講義の総括（最終レポート提示）	S

らは，生活の営みをとらえるコンセプトととらえることもできる。第３ステップ（第７回から第12回）はパフォーマンス課題の把握と企画の構想，企画の発表であった。第４ステップ（第13回から第15回）は総括を行い，自分自身の生活課題をみつめ，課題解決に向けての具体的な方策を考えさせる場とした。前年度との違いは，弁当企画に重点を置かず，第２ステップで，生活概念の認識を深める時間を充分にとったこと，そのために調理実践の場を授業外課題としたこと，パフォーマンス課題の提示を直前に行ったことである。

最終回で提示する最終レポートとして，「家政学」の歴史と現在の定義と意義について，資料に基づいてまとめさせることは前年度と同様であった。

（２）2017年度授業の成果と課題

履修者27名の授業成果を５回のディスカッション前後の各テーマの認識の変容を問う調査結果の分析からとらえた。また，その後教科の指導法の授業である「家庭科授業論Ⅰ」において，家庭科の授業づくりに，本授業の成果が役立っているかどうか調査により問い，あわせて分析した。

2017年度商品企画のコンセプト（テーマ）と問いは「健康」(あなたは健康ですか，健康な生活とは)，「協働」(あなたは家族などの身近な人との関係や家庭生活をよりよくしたいか，家族の協働と家庭生活はどうあるべきか)，「豊かさ」(あなたの生活は豊かか，豊かな生活とは)，「生活・地域文化」(生活文化や地域文化を大切にしたいか，生活文化や地域文化はどうあるべきか)，「家政学の意義」(家庭科教師として家政学を理解することが必要か，家政学とは）であった。分析の視点は，前年度と同様で次の通りであった。

① 生活課題を具体的にとらえられているか
② 自己の生活者としての課題を認識しているか
③ 家政学の理解と生活実践を結んで考えているか

自由記述の分析には，IBM SPSS Text Analytics for Surveys バージョン4.0の「感性81_Sentiments」日本語用パッケージを用いた。それぞれの自由記述はカテゴリを自動生成し，視覚化パネルのカテゴリWeb 機能を用いて表した。これは分類されたカテゴリの重複度とつながりを図示したもので，カテゴリ間の位置や距離は意味をもたない。

表３に，各テーマにおける授業前後の共通の問いに対する27名の記述に出現したカテゴリ数を示した。「健康な生活」，「家政学の意義」，「豊かな生活」のテーマにおける問いについては，授業後のカテゴリ数の増加が認められたが，「家族の協働」と「生活文化」については，カテゴリ数の変化はみられなかった。

また，図２－１～図２－10に，５回の授業でのディスカッション前後の各テーマへの問いに対する27名の記述分析の結果を示した。図２－１は授業前の「健康な生活とは」という問いに対する27名の記述，図２－２は授業後の同問いに対する記述に対して，分類されたカテゴリの重複度とつながりを図示したものである。

表３　５つのテーマへの問いに対する授業前後の記述に出現したカテゴリ数と前後比

テーマ	授業前	授業後	授業後／前
１．健康な生活	12	40	3.33
２．家族の協働	36	34	0.94
３．豊かな生活	21	32	1.52
４．生活文化	34	34	1.00
５．家政学の意義	4	10	2.50

授業前に比べて授業後はカテゴリ数が12件から40件に増加し，それらを結ぶ線も複雑になっていることから，後の記述において語彙数が増え，それらを関連付けて認識したことが明らかになった。授業前の「健康」のとらえ方について，授業の中で教員から視点が狭いとの指摘があり，各教員の専門の立場から多様な視点をもつための情報を得たことが，授業後のカテゴリの増加につながったと考えられる。５つのテーマの

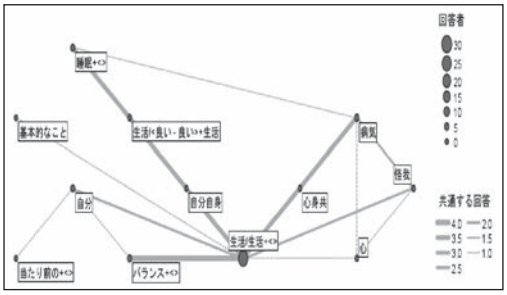

図２－１　「健康な生活とは」の記述（授業前）

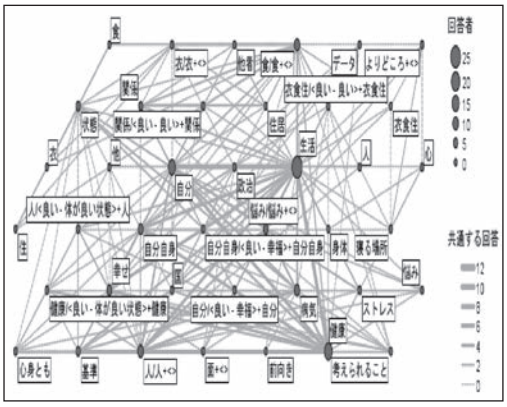

図２－２　「健康な生活とは」の記述（授業後）

中で，本テーマは前後のカテゴリ数の増加率が最も高かった。それは,「健康」という概念が，衣食住，家族，経済，教育など，７名の教員の専門領域からの関連情報を提供しやすく，学生もそれらを理解しやすかったことに起因していると思われる。また，カテゴリの内容が多様になるとともに,「自分」というキーワードが含まれるカテゴリが増え，多様な別の要素と関連付けられて新しいカテゴリとして再生されていることも見て取れた。さらに，授業前は自身や身近な視点にとどまっていたが,授業後は「他者」「政治」「国」など，社会に視点を広げており,「健康」概念を多面的にとらえ始めている状況もみられた。

図２－３は授業前の「家族の協働と家庭生活はどうあるべきか」という問いに対する27名の記述，図２－４は授業後の同問いに対する記述に対して，カテゴリの重複度とつながりを図示したものである。

授業前36件,後34件でカテゴリ数は後の方が減じた。

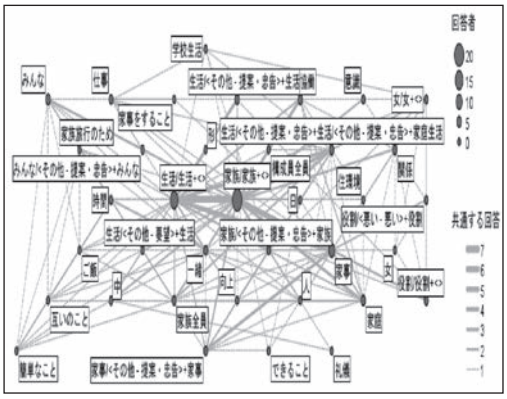

図２－３　「家族の協働と家庭生活はどうあるべきか」の記述（授業前）

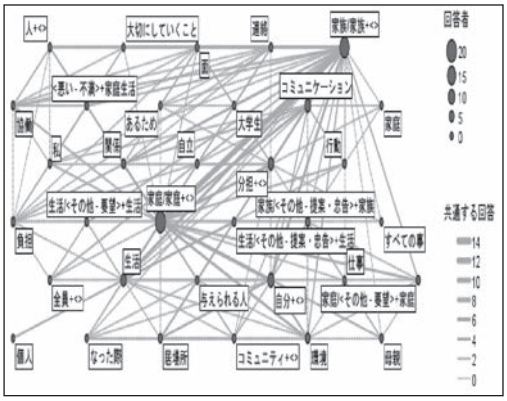

図２－４　「家族の協働と家庭生活はどうあるべきか」の記述（授業後）

しかしながら，カテゴリ名をみると,「家庭」というキーワードが含まれるカテゴリが増加し,「コミュニケーション」,「連絡」,「コミュニティ」,「居場所」など，家族員や家庭という単位の相互作用やそれらによって作られる空間にも認識が及んでいることが見て取れた。換言すると，家族員一人ひとりによる行為や意識を俯瞰し，それらの関係性や総体に視点が向いたことによって，いくつかのカテゴリが整理されたのではないかと考えられる。「健康な生活」のテーマのような，授業後の語彙数の増加はみられなかったものの，語彙の質の変化は認められたと考えてよいだろう。本テーマは，各教員の専門的視点から多様な情報を得て,「家族の共同や家庭生活」に対する認識が広がったというよりも，各教員のライフスタイルやライフステージに基づく話題から，自分たちが創生していく家族や家庭生活へのイメージがふくらみ整理できたのではないかと推察できる。

図２－５は授業前の「豊かな生活とは」という問いに対する27名の記述，図２－６は授業後の同問いに対する記述に対して，カテゴリの重複度とつながりを図

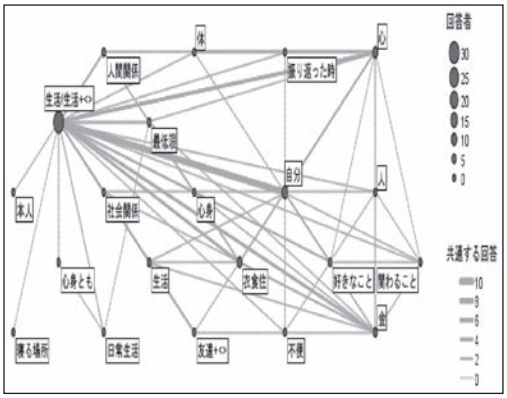

図２－５　「豊かな生活とは」の記述（授業前）

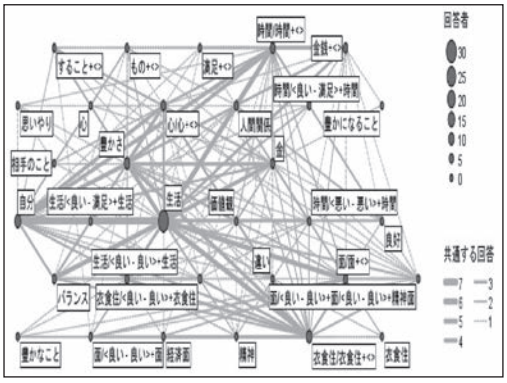

図２－６「豊かな生活とは」の記述（授業後）

示したものである。

授業前に比べて授業後はカテゴリ数が21件から32件に増加し，それらを結ぶ線も複雑になっていることから，「健康な生活とは」に続いて，後の記述の語彙数が増え，それらを関連付けて認識したことが明らかになった。授業後には授業前にはみられなかった「時間」，「価値観」，「精神」，「衣食住」，「バランス」などのカテゴリが抽出されており，「豊かな生活」のとらえ方について，授業中の各教員からの情報が生かされたと推察できる。「健康な生活とは」と同じほどにはカテゴリ数の増加がみられなかったのは，「豊かさ」の概念が「健康」に比べて，具体的にとらえにくいものであることにも起因していると考えられる。教員も情報を焦点化して提供することが難しかったと思われる。

図２－７は授業前の「生活文化や地域文化はどうあるべきか」という問いに対する27名の記述，図２－８は授業後の同問いに対する記述に対して，カテゴリの重複度とつながりを図示したものである。

授業前34件，後34件でカテゴリ数に変化は見られなかった。しかしながら，「文化」につながる共通する回答が多いカテゴリとして，授業後には「生活」以外に「世代」，「意識」，「時代」，「地域」，「自然」，「融合」などが抽出されており，「文化」を抽象的で一面的にしかとらえられなかった授業前の状況から，時間軸や空間軸でそれをとらえられるようになったことが見て取れた。教員の専門の立場からの具体的な情報提供も効果的であったと思われる。授業後の記述の例を紹介すると次の通りであった。「今まで継承してきた文化をただ大切にするのではなく，それの是非を考え，それに応じて新しい文化も柔軟に取り入れるようにするべき。大切なのは今，私たちが受け継いでいる文化は何か，どんなものがあるのか，それはどうあるべきかなどを深く考えることであると思った。」「文化や伝統に新しいことを付け加えていくべきだと私は思った。少し文化を継承することにとらわれすぎていると感じたためである。今を生きる私たちの生活はどんどん新しいものに変わり，便利な方向に進んでいる。よって，良い部分は取り入れていき，良い伝統や文化も忘れずに継承していけばよいと考える。また，伝統的な食文化，快適な暮らしにつながる住文化，これまでの衣文化など，これらのことを知っていくことが大切であり，良い部分を継承していくには家庭科が重要な役割を担っているのだと認識した。」「文化」は自分たちにとっては変えがたいものであり，関心をもてない面もあるという授業前の認識から，授業後には自分たちが積極的に変えてよいものであると考えはじめ，その責任の重さも認識できていることが成果であろう。

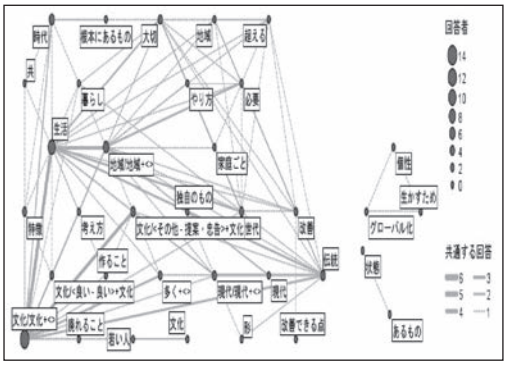

図２－７　「生活文化や地域文化はどうあるべきか」の記述（授業前）

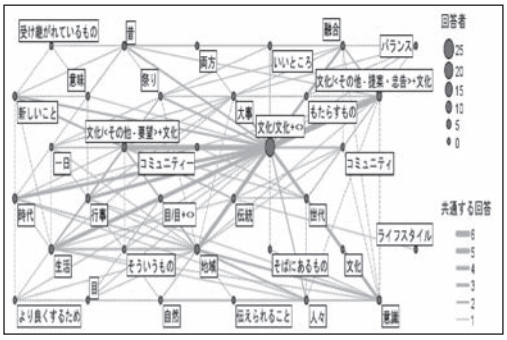

図２－８　「生活文化や地域文化はどうあるべきか」の記述（授業後）

図２－９は授業前の「家政学はどういう学問か」という問いに対する27名の記述，図２－10は授業後の同問いに対する記述に対して，カテゴリの重複度とつながりを図示したものである。

授業前に比べて授業後はカテゴリ数が４件から10件に増加し，それらを結ぶ線もある程度複雑になっていることから，ほとんど記述できなかった授業前の状況から，授業後においては語彙数が増え，それらを関連付けて認識したことが明らかになった。特に「家政学」を学問としてとらえる記述が多かったことは，本授業の改善において特筆すべきであろう。他の４テーマに比べて，教員側から「家政学に意義がある」ことは強調したものの，それに関わる多様な考え方を提示できなかったことが，授業後のカテゴリ数の少なさにつながったと思われる。各教員の研究アイデンティティーの基盤にある専門科学と家政学とのつながりについての考えを提示できれば，家政学の深い理解につながった可能性はある。

授業の記述の一例は次の通りである。「人間生活に関わる実践的な総合科学。実践することで意味を持つ

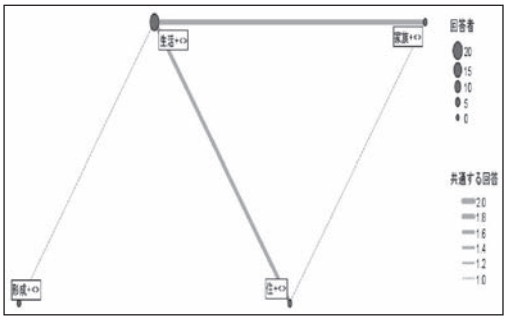

図２－９　「家政学はどういう学問か」に関する記述（授業前）

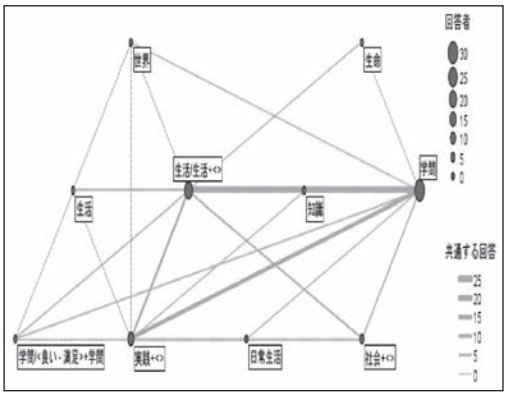

図２－10　「家政学はどういう学問か」に関する記述（授業後）

学問の複数の領域が組み合わさり，連携しあうことで成り立つ学問。家庭科という教科を支える，家庭科の根底にある総合的な学問。学ぶことで生活を豊かにすることができる学問。」「実践的かつ総合的な学問であると考える。だからこそ他教科などを勉強し専門的な知識を身につけることが大事でそれをまとめて自分の生活に生かす学問なのかなと思った。また，高校生まででは家政学という学問は難しいのかなとも思った。専門的な知識をまず身につけ，それからそれを生かしていく学問であるから大学生が学ぶのに適しているのかなと思った。」前者のように，表層的ではあるが正しく家政学を理解し，教科家庭科との関係も適確にとらえている学生がいる一方で，後者は，家庭科という教科と家政学の関係をとらえる上で，その記述に重要な課題を含んでいる。家庭科だけではなくいずれの教科においても，親学問（背景学問）をそのまま学校教育の各教科で学ぶことはない。それぞれ独自性をもった各教科の目標に照らして，子供たちの発達段階に応じて学習内容は精選され仕組まれる。このような教科と親学問（背景学問）との関係性を認識して，教員養成における教科内容の指導を行う必要がある。特に家政学のような，研究対象が広範な学問を背景学問とする家庭科では，家政学を支える多様な学問に精通しつつ，家庭科内容としてそれらを再編成する能力が求められるのである。後者の学生のような考え方は，家庭科不要論にもつながる。

以上，５つのテーマの中で，「健康な生活」と「豊かな生活」のディスカッション前後においては，カテゴリ数が顕著に増加し，カテゴリ間のつながりを言及できるようになっていた。ディスカッション前後では学生の意識や思考に変化が起こっていることが示唆された。教員それぞれの専門とする領域からの情報提供が効果的に働いたと推察する。

一方，「家族の協働」や「生活文化」のテーマでは，ディスカッション前後で，カテゴリ数の変化は見られなかったものの，カテゴリの質的な変化は確認できた。

教員から専門性を生かした情報提供を行うことが難しいテーマであったとも考えられる。しかしながら，複数の教員からの話題提供は，多様なライフスタイルやライフステージによる生活価値の違いを知る機会になったと推察する。

「家政学の意義」については，家政学に対する理解や認識が深まっている様子はみられたものの，教員の準備不足もあり，パネルディスカッションの効果をみるには至らなかった。教科家庭科と家政学との関係性についても，理解を深めるには至っていなかった。

2017年度のこれらの授業後，「家庭科授業論Ⅰ」（教科の指導法）において，歴史的観点から，また文部科学省が示す教科のとらえ方から，教科家庭科を理解し，家庭科授業をいくつかの事例に基づいて理解した上で，オリジナルの学習指導案を作り，授業の導入部分のみ模擬的に授業表現することを行った。図３に，その授業後に「家庭科の背景学問としての家政学のとらえ」について問うた結果を示した。また，図４に「家庭科の意義および家庭科の授業を考える上で本授業（人間生活（家庭科）教育概論）が役立ったか」について問うた結果を示した（いずれも両授業を履修した25名対象）。2017年度後期３タームと４タームに行われたこれら２つの授業で，家政学と教科家庭科への認識を深め，両者の関係についても学んだ結果，図３の通り，「家政学が家庭科の背景学問と思うか」という問いに対して，64.0％の学生が肯定的に回答した。また，図４の通り，家庭科の意義や家庭科の授業を考える上で，「とても役に立った」「役に立った」と６割以上の学生が肯定的に評価した。さらに，「家庭科授業論Ⅰ」で複数の内容を関連付けた題材の構想や，現代的な生活課題への関心につながる題材名の工夫などが

みられ，生活への認識の深まりがその成果につながったと評価していた。

一方で，図３の「家政学が家庭科の背景学問と思うか」という問いに対して，「わからない」と回答した学生が36.0％みられたことは，教科家庭科と家政学の関係性の理解について課題を残している。「人間生活（家庭科）教育概論」におけるさらなる工夫が必要である。また，図４においても，「概論」は家庭科の意義を考えるうえでは役に立ったが，具体的な家庭科授業を考えるうえでは直接効果を感じなかった学生も少なからずみられた。今後は，具体的な授業を考えるために必要な現代の生活課題をとらえさせる必要があると考えられる。

以上の通り2017年度の授業は，弁当の商品企画におけるコンセプトとして提示された５つのテーマについて，教員７名をパネラーとしてディスカッションを行い，その成果を生かして商品企画を構想し，多様な視点から生活者としての自己の課題を意識させ家政学の理解を深めることを意図した。その結果，教員全員によるディスカッション形式の学習環境は生活課題を多面的にとらえるために効果的であった。一方で，継続的に考えさせたい本質的な問いとパフォーマンス課題提示の方法が適切でなかったために，課題遂行において，事前のディスカッションによる生活課題認識や情報整理が効果的に生かされなかった。

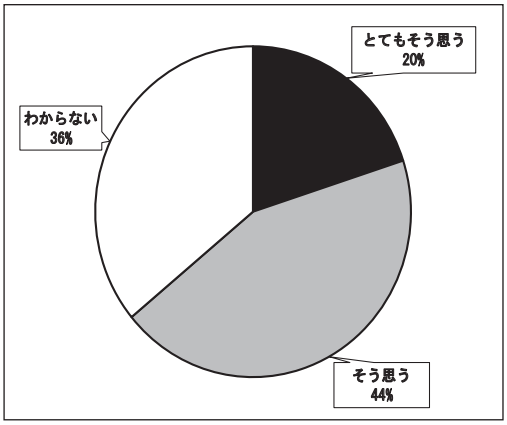

図３　家政学が家庭科の背景学問と思うか（2017年度）

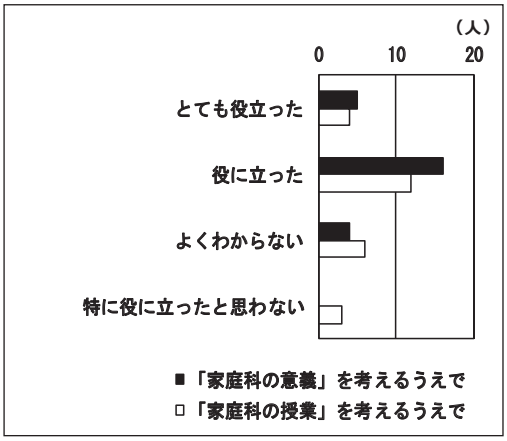

図４　授業は家庭科の意義や授業を考える上で役に立ったと思うか（2017年度）

４．2018年度授業の構想

2016年度および2017年度の「人間生活（家庭科）教育概論」の課題を踏まえて，2018年度の授業構想を行った。

１年次生対象，２セメスターに開講，後期３タームに設定し，１週ごとに180分の授業を7.5週で行うことはこれまでと同様である。

新構想では，最終パフォーマンス課題を「現代の生活課題を一つ選び，特定の集団に対して，その課題への関心を高め，積極的に対応し，改善することを促すセミナー案を企画，発表する」こととした。構想案は表４のとおりである。

パフォーマンス課題に向かう「本質的な問い」は，これまでと同様に，「生活課題はどのようにとらえられるのか」とし，その中で重視される「永続的な理解」を「生活の要素と生活設計やライフスタイルの要因の理解」とした。現代の生活課題について特定の集団を対象として，その課題への関心を高め改善するためのセミナー案を企画することによって，多面的に現代の生活課題をとらえることができ，それらを解決するために必要な情報を収集し，多様な方策の中から最も適切なものを選ぶという問題解決的な思考と意思決定能力，さらにそれを他者に伝える表現力を培うことができると考えた。これまでの弁当企画では，生活技能の一つである調理の実践，体験を通して具体的に生活課題をとらえることを意図してきたが，新構想では企画内容を自分たちで設定するため，企画構想のプロセスにおいて実践，体験を行うかどうかは自由とした。他者に自分たちの構想を伝え，評価されたり意見をもらったりすることによって，新たな課題を見出すことをねらったことはこれまでと同様である。担当教員が一人増え，８人の教員全員が参加するパネルディスカッションによって，多様な視点で提案企画に対する意見交換を行うこととした。教員８名は，それぞれ，家庭科教育，生活経済，人間発達，食生活栄養，食生活調理，衣生活アパレル，住生活環境の専門をもつ者であり，それぞれの専門科学の立場から学生たちの企

表４　2018年度授業の構想
（Ｓ・Ｋ：教科教育担当，Ｍ：教科内容担当）

	授業内容	担当
0	【事前課題】「あなたが理想とする自立・自律した生活について，次のキーワードを2つ以上用いて述べなさい。」家族・家庭生活，衣食住，消費・環境，協力・協働，健康・快適・安全，文化の継承・創造，持続可能な社会の構築，200字以内で記入	
1	【事前課題】に基づいて班別（３～４人×８班）にKJ法で概念整理，意見交換，発表（概念相互の関係，生活要素との関係をとらえられるようになる）	SMK
2	本授業の最終的なパフォーマンス課題「現代の生活課題を一つ選び，特定の集団に対して，その課題への関心を高め，積極的に対応し，改善することを促すセミナー案を企画，発表する」を伝える。課題は班で行うが，そのメンバーについては自分たちで決めることとする。「理想とする自立・自律した生活」についての概念整理に基づいて，自分の生活課題を挙げ，意見交換，発表（自分の優先する生活課題をとらえられるようになる）	
3	【事前課題】先週の「生活の概念整理」及び「各自の生活課題」に基づいて，追究したい「現代の生活課題」を200字以内で記入，教員への関連の質問も記入。自分たちで決めた班でKJ法により整理，意見交換，発表（最終パフォーマンス課題で取り上げる現代の生活課題を意識できるようになる。）	全員
4	前時にＫＪ法でまとめた「現代の生活課題」についてパネルディスカッション（最終パフォーマンス課題で取り上げる現代の生活課題を具体的に多面的に意識できるようになる）	
5	人間生活教育と家政学，人間の生活と営み，教育機能 家庭科の背景学問としての家政学	SMK
6	「家政学」の視点から「生活課題」についてディスカッション，企画案の構想開始	
7 8	企画案の中間発表，協議（各班15分）	全員
9 10	企画案の再考	SK
11 12	企画案の最終発表，協議（各班15分）	全員
13 14	生活者としての発達のために（現代の生活課題と生活能力）	SK
15	講義の総括（最終レポート提示）	SK

画について助言が可能である。

最終的にメンバー全員で相互評価および自己評価を行い，再検討のための課題を明確にする。評価規準は，①基礎的・基本的な知識および適切で信頼できる新しい情報に基づいて企画されているか。②課題解決の目的が明確であるか。③多様な解決策を構想し，根拠をもって選択しているか。④他者に自分たちの企画をアピールするための表現の工夫があるか。⑤多様なライフスタイルをとらえ，それらの中で自分の生活課題を発見しているかなど，これらもこれまでと同様とした。

授業の到達目標は次の通り，前年度と同様とした。「人間生活の質的向上および生活主体者としての生活実践力の育成をめざす人間生活教育について関心をもつとともに，家庭科教育や生涯学習における生活教育の意義を理解し，現代の生活課題を総合的・体系的にとらえ，それらに基づいて自分の生活課題について考えることができる。」

主な改善点は，上述した通り，パフォーマンス課題において，企画内容を自分たちで考え設定するよう変更したことである。最終課題を早い段階から継続的に意識させるように再構想し，家政学の理解も，その一環として組み込んだ。

15回の授業は４つのステップで構成した。まず，第１ステップ（第１回と第２回）では生活要素相互の関係，および自分の優先する生活課題をとらえられるようになること，第２ステップ（第３回と第４回）ではパフォーマンス課題の把握と構想への準備，第３ステップ（第５回から第12回）は一次案の企画，発表，再検討と二次企画の構想（家政学の理解を含む），第４ステップ（第13回から第15回）は総括を行い，自分自身の生活課題をみつめ，課題解決に向けての具体的な方策を考えさせる場とした。

５．まとめ

広島大学教育学部人間生活系コースにおけるカリキュラム改善のために，家庭科教員養成カリキュラムの核となる科目の2016，2017年度の成果と課題を明らかにするとともに，2018年度の実施に向けて再構想を行った。

2016年度授業では，商品企画構想や調理の実践を通して具体的な生活課題を認識し，家政学の理解に基づいて生活改善の方向を意識していることが明らかになった。一方で，抽出された語句が「食」や「家族」に偏っていることから，継続的に考えさせたい本質的な問いとパフォーマンス課題の遂行における課題認識や情報整理が効果的に結びつかなかったことが課題と

して挙げられた。2017年度の授業では，生活課題を多面的にとらえさせるために，弁当の商品企画における５つのコンセプトについて，教員７名をパネラーとしてディスカッションを行うことを試みた。その成果を生かして商品企画を構想し，多様な視点から生活者としての自己の課題を意識させ家政学の理解を深めることを意図した。その結果，教員全員によるディスカッション形式の学習環境が生活課題を多面的にとらえるために効果的であった一方で，パフォーマンス課題提示の方法が適切でなかったために，課題遂行において，事前の生活課題認識や情報整理が効果的に生かされなかった。コース専門の科目を学んでいない１年生対象の授業であること，180分×7.5回の時間しか保障されていないことを考慮し，2018年度においては，現代の生活課題を総合的・体系的にとらえられることを優先する構想の必要を認め，パフォーマンス課題を変更することとした。

今後は，2018年度の本科目の学習効果，成果を検証するとともに，カリキュラム全体を通して，家庭科教育に携わる教員としての専門的な資質・能力を高める過程で教科観を深めていけるような内容の体系化と方法の工夫を検討していく予定である。同時に教科内容学の位置づけもあわせて検討することとする。

【参考・引用文献】

1）志村結美・大島寿美子，「大学生の家庭科観」，山梨大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要 教育実践学研究 第13号，pp.1-12，2008

2）室雅子，「教員養成課程における大学生の家庭科観からみる家庭科教育の課題」，椙山女学園大学研究論集 第45号（社会科学篇），pp.239-249，2014

3）小倉育代・宮崎陽子・大本久美子・表真美・岸本幸臣・長石啓子・吉井美奈子，「家庭科教員の家政学認識と教育現場の課題」，日本家政学会 家政学原論研究 No.43 研究ノート，2009

4）鈴木明子 村上かおり 梶山曜子，「家庭科教員養成における教科観の構築に関する研究－広島大学人間生活系コースにおけるカリキュラムの検討・改善をめぐって－」広島大学大学院教育学研究科紀要第二部第65号，2016，pp.257-264

5）『家政学のじかん』編集委員会『今こそ家政学 - くらしを創る１１のヒント』ナカニシヤ出版，2012

6）西岡加名恵『教科と総合学習のカリキュラム設計－パフォーマンス評価をどう活かすか』図書文化，2016